

「見る」を含む学習の系統性（2）

—写真や絵画を見るときには—

坂東 智子

Systematicity of Learning Including “Seeing”(2) : When Viewing Photos and Paintings

BANDO Tomoko

(Received September 27, 2019)

1. はじめに

本研究は、国語科における「見る」力の系統的な育成を目的とする2017年度からの継続研究の一環である。

これまでに、国語科における「見ること」の重要性については、多くの指摘がなされている¹⁾。石田(2011)²⁾は、これまで「見ること」は「読むこと」のアナロジーで捉えられ、メディア・リテラシー教育との関係で議論されることが多いと述べ、両者を区別して、「見ること」は「見る」経験を言葉によって表現することであり、「見る」は「非言語テキストを対象」とし「言葉にならない状態・言葉になる以前の状態のことである」と定義する。さらに、石田は国語科においては「言葉にならない状態・言葉以前の状態から言葉を紡ぎだすことによって生成される学び」つまり「見ること」の学びが重要だとの認識を有している。

それに対して本研究では国語科における「見ること」ではなく「見る」活動、「見る」経験そのものに着目した研究を志向するものである。

その前提となる考えとして、言語哲学者のヘルダー(1744-1803)が『言語起源論』(1772)で提示した命題「われわれは一つの思考する共通感覚器官である」³⁾がある。筆者は、ヘルダーの感覚器官と言語形成の関係についての考えを、「視覚の洗練は、理性の洗練に伴うものであり、理性は命名つまり言語とこれに類似したものの貯えによって洗練されるものである」と捉え、視覚の洗練と言語形成のプロセスは表裏一体のものであると解釈している。国語科における「見ること」以前の「見る」を含む学習に着目する第一の所以はここにある。

また、国語科教育の中に「見る」活動を取り入れることの提案はこれまでも行われている。鹿内(2006)⁴⁾は、浜本(1996)⁵⁾、町田(2005)⁶⁾を踏まえ、「絵図を教材にして、そこから何かを発見させたり、創造さ

せたりすることができるなら、その絵図は、言葉を生み出していくための効果的な『場』となるであろう。」と主張する。「言葉を生み出していく」効果的な「場」づくりは、国語科授業づくりの中核を担い、小中高大いずれの校種の教員にとっても須要のものであろう。鹿内は絵図を「見る」ことから「発見」や「創造」を導いていく授業を試み、授業記録の分析から、次の3つの方法を取り出している。①発見や創造を引き出しうる絵図を選定する。②新しい意味の発見は、絵図を構成する「部分に注意を払う」方法によって行う。③新しい意味の創造は、絵図を構成する各部分を関連づけて物語をつくるという方法によって行う。

この「全体を見る」⇒「部分を見る」⇒「部分と部分の関係を見る」という方略は、筆者が先行研究を基に試案として提案する「見る」方略レベルⅠ～Ⅲに相当する(後掲表2)。さらには、「各部分を関係づける」活動としての物語化の有効性を検証しており、本研究によって示唆に富むものである。

本研究ではこれまでに、先行研究⁷⁾の知見と、筆者のこれまでの古典の授業に源氏絵や絵巻を取り入れた授業の開発に関する研究⁸⁾を手掛かりとして、「見る」発達の系統性を考える観点の抽出を試みた。これまで国語科において研究対象とされる「視覚テキスト」の多くは、構成され創り出されたものであった。それらは「動的な映像」と「静的な映像」に大別されるが、いずれも制作者が意図をもって創り出したテキストであったといえよう。それに対して本研究では学習者が視覚を通して感知する全てのものを「視覚テキスト」とする(後掲表1)。本稿では、これまでの本研究での成果や提案を活用しつつ、現行の教科書教材を用いた「見る」力の系統的育成を、実現可能な形で提案することを目的とする。今回は、小中学校の国語教科書における「絵画や写真

を見る」観点に関するまとまった記述を取り出し、「見る」力の観点や系統性についての考察を試みる。本稿で取り上げた教科書掲載のコラムは、「絵画や写真などを見るとともに、文章を読むときと同じような方法で関わることができます。」という一文が冒頭に置かれている。そこで、改めて「見る」と「読む」のアナロジーがこれ

までどのように捉えられてきたのかを複数の文献を検討することによって整理する。本稿で対象とする教科書は、山口県内の公立小中学校で最も多く採択されている、小学校（光村図書H27版）、中学校（光村図書H28版）である。

表1 「見る」対象となる「視覚テキスト」の種類と意味構成レベル⁹⁾

数量	種類	テキスト内容	構成意図
単独 複数 ひとまとまりの	静止画的 動画 事物 人物 自然や風景	具象的 象徴的 記号的 象徴的 複合的	構成意図をもたない 簡単な構成意図をもつ 複雑な構成意図をもつ

表2 「見る」と「見ること」レベル（試案）¹⁰⁾

レベル	認識	方略	思考	言語化
I	全体をおおまかに捉える	全体を見る（おおまかに、詳細に、近づいて、遠くから、俯瞰的に）	構成要素やその関係から場面や様子内容を考える	見えるものと言葉を対応させる
II	個々の構成要素を外見から明確に認識する	部分を見る（詳しく、分析的に）	解釈する（簡単な、象徴的な意味）	意味内容を構成し言語化する
III	構成要素の意味内容を認識する	部分と部分の関係を見る	象徴や社会・芸術上の約束事を利用して解釈する	象徴性、シンボルなどを理解し言語化する
IV	構成要素の関係を認識する	方略を知っている（比較、分類、類推、推測等）	他の情報を参照して解釈する	テキストの特徴や、内容、目的と形式の関係を吟味し議論する
V	全体の内容や特徴を捉える	ふさわしい方略を選ぶ	内容、目的と形式の関係を吟味評価する	解釈の根拠を説明する
VI	自分の経験や既知のものと関連付けて認識する	目的に合わせて方略を組み合わせて用い、それを吟味評価する	受手の解釈はコードや約束事により形成されているという仕組みについて考える	ひとまとまりの視覚テキストを対象とし、意味を構築したり、解釈の根拠を挙げたりして説明する
VII	社会文化的背景や因果関係を認識する	別の文脈で得た知識を視覚的テキストの理解に適用する	社会・文化的な文脈がテキストに反映されているか考える	社会・文化的な文脈がテキストに反映されているかについて議論する
VIII	時間軸や空間軸にテキストを位置づけ認識できる		作成された文脈、受け手と発信者との相互関係を考える	時間軸や空間軸にテキストを位置づけ論じる
IX	受手の理解を形成するコードや約束事の働きを認識する		間接的に表現されている社会・文化的価値、前提とされていることがらを分析的に考える	

2. 国語教科書の「絵画や写真を見る」観点に関する記述
 2. 1 小学校6年【コラム】「絵画や写真を見る
 ときは」
 H27年版「国語六創造」（光村）には、H24年版には

なかった【コラム】「絵画や写真を見る時には」¹¹⁾
 が掲載された。【コラム】の内容を検討する前に、H24
 版とH27版の目次を比較しておきたい。（網掛けは坂東
 が付記した）

表3 「国語六創造」（光村）H24年版¹²⁾、H27年版¹³⁾の目次

H24年版「国語六創造」(光村)目次	H27年版「国語六創造」(光村)目次
7 ものの見方を広げよう(読む) 『鳥獣戯画』を読む 高畑勲 この絵、私はこう見る(書く) 漢字を正しく使えるように 覚えておきたい言葉 声に出して楽しもう 天地の文 本は友達 私と本 森へ 星野道夫	6 筆者のもの見方をとらえ、自分の考えをまとめよう(読む) 『鳥獣戯画』を読む 高畑勲 【コラム】絵画や写真を見る時には この絵、私はこう見る(書く) 言葉 漢字を正しく使えるように 【コラム】覚えておきたい言葉
8 言葉について考えよう(読む) 言葉は動く 渡辺実 自分を見つめ直して(書く) カンジー博士の漢字クイズ大会	7 伝統文化を楽しもう(読む) 伝えられてきたもの 狂言 柿山伏 「柿山伏」について 山本東次郎 言葉 日本で使う文字 表現を選ぶ 天地の文 福澤諭吉 未知へ 木村信子(読む)

最初に気付くのは、単元名の違いである。H27は「筆者のもの見方をとらえ」「自分の考えをまとめよう」となっている。「読む」単元の中で、中心教材を「読む」から、私(自分)の考えをまとめる、「書く」への間に、【コラム】絵画や写真を見る時にはがある。次に、コラム本文を見てみたい。(引用部丸数字は一文ごとに坂東が付記した)

〈資料1〉絵画や写真を見る時には(小6)

①絵画や写真などを見る時にも、文章を読むときと同じような方法で関わるができます。

②例えば、「明るい感じがする。」と思ったら、どの部分からそのような感じを受けたのかを言葉にしてみましょう。③同じものを見ていても、人によって見方や感じ方がちがうことに気づくことができます。④また、一つの作品全体を見たり、細かい部分を見たり、複数の作品を比べたりすることで、作者の意図や考えが見えてくることもあります。

上のコラムを、奥泉(2004)のWA州「見ること」のレベルF・V5の大目標と照らして分析を試みる。V5の大目標は次の通りである。(引用部の英小文字は一文ごとに坂東が付記した)

〈資料2〉WA州「見ること」レベルF・V5

a テキストの様々な解釈に対して、考え得る根拠を説明することができる。b 物語の構造といった知識を、そのテキストの発想や表現に対する自分なり

の理解に適用することができる。

c そして、文脈やテキストの形式、コードや約束事といった知識を適用して、その視覚的テキストがある特定の見え方で見えるようにするためには、どのように構成されているかをふり返って、吟味することができる。

資料1①は「絵画や写真を見る」と「文章を読むとき」の方法には共通するものがあることを述べている。これは、資料2bにも同様のことが示されている。「見ること」を「読むこと」のアナロジーで捉え、それらに共通した方法を意識し適用しつつ相互の転用を積極的に図るよう促す記述ともとれる。②はa「テキストの様々な解釈に対して根拠を説明することができる」に対応するものであろう。②「明るい感じがする」は「解釈」というよりは「印象」というレベルに留まっているが、どの部分からそのような感じを受けたのかを言葉にすることは印象に対しての根拠を説明するに該当すると考えられる。小6段階での「見る」を、単なる「印象」から「解釈」レベル(意味内容を構成する)に導くためにはどのような方法が考えられるであろうか。資料1④には、「一つの作品全体を見る」「細かい部分を見る」「複数の作品を比べる」という3方法が示されている。これらは前掲表2 I・IIレベルの認識、方略において「全体を見る(おおまかに、詳細に、近づいて、遠くから、俯瞰的に)」から「部分を見る(詳しく、分析的に)」の

「見方」「見る」方略に相当する。表2はまだまだ試案の段階であるが、こういった「見る」と「見ること」レベルをさらに精査吟味し系統を示すことは必要かつ喫緊の課題である。H27版が、コラムで、「読む」⇒「見る」ことの意識化⇒「書く」という流れを示したのは注目に値する。

3 「見る」と「読む」のアナロジー

3.1 「見る」「読む」の辞書的な意味

中心教材は「『鳥獣戯画』を読む」である。題名がすでに「画」を「読む」となっている。題名読みを通して、「見る」を「読む」とのアナロジーで捉え、さらには共通した方法を取り出し意識させて相互の転用を促すことは可能であろう。それでは「見る」「読む」とはどのような行為か。辞書的な意味を手掛かりに考えてみたい。(下線、網掛けは発表者が付記した)

表4 見る・読むの意味『日本国語大辞典』第二版¹⁴⁾

みる
みる【見・看・視・観・覧】 一. 目によって物の外見、内容などを知る。また、それをもとにして考えたり判断したりする。 ①目にとめる。目で事物の存在を感じとる。 ②遠くに目をやる。ながめる。また、見物・鑑賞する。 ③目にとめてこれこれだと思ふ。物事をこうだと判断する。 ④占う。また、予知する。 ⑤悟り知る。わかる。 ⑥よく注意して調べる。観察する。また、診断したり鑑定したりする。 ⑦文字に表現されたことを知る。読む。 二. 物事を経験したり、物事や人に対して身をもって働きかけたりする。 ①経験する。ある物事を身に受ける。 ②人の気持ちや意志、物の質などがどうであるかをためす。 ③人と顔を合わせる。会う。 ④(③から転じて)男女の交わりをする。また、夫婦として暮らす。 ⑤世話をする。面倒をみる。 ⑥ある行為・作用が実現する。 三. 補助動詞として用いる。
よむ
よむ【読・詠】 一. [他マ五(四)](声に出してことばや数などを、一つ一つ順に節をつけるように区切りを入れながら(唱えるるように)言う行為を表すのが原義) ①声に出して一つ一つ区切りながら言う。

- ②詩歌をつくる。詠ずる。
- ③文章などに書かれた文字をたどって見ていく。また文章・書物などを見て、そこに書かれている意味や容を理解する。
- ④(「訓」とも書く)漢字の字音を国語の訓(くん)表す。漢字を訓読する。
- ⑤眼前の事物・行為を見て、その将来を推察したり隠された意味などを察知したりする。囲碁・将棋などで、先の手を考えたり、相手の手筋を察知したりする意にもいう。
- ⑥講釈師などが歴史上の事件などを仕組んで講ずる
- ⑦カルタ遊びをする。

二. [マ下二] 割愛

辞書的には、対象はそれぞれ、文字と絵画と異なっているが表4「よむ」項目「③文章などに書かれた文字をたどって見ていく。また、文章・書物などを見て、そこに書かれている意味や内容を理解する。⑤眼前の事物・行為を見て、その将来を推察したり、隠された意味などを察知したりする。」にあるように、対象となる文字をたどって見ていくことや事物・行為を見て、意味や内容を理解し、将来を推察したり、隠された意味を読み取ったりすることが、「見る」であり「読む」行為だといえよう。

3.2 読者反応論と美術の鑑賞教育から

次に、読者反応論と美術の鑑賞教育に関する著作から「見る」と「読む」に関連する部分を引用する。

(資料3) 反応をベースにした読み¹⁵⁾

ローゼンブラットが提唱したことは、「reader response theory (読者反応論)」や「transactional Theory (交流理論)」と呼ばれています。(中略)

ローゼンブラットの主張は、「作者が書いたテキストは、読者が読んで意味をつくり出すまでは紙に落ちているインクにすぎない」というものです。つまり、読者によって解釈され、意味がつくり出されて初めて作品になるというスタンスなのです。これは、私も含めて多くの人達はその弊害を受けた新批評論の立場(=ある権威者が考え出した解釈を押し付けるという、日本の国語教育の主張であり続けてきたアプローチ)とはずいぶん違います。というより、正反対の立場に立つアプローチです。要するに、一人ひとりの解釈は違うわけですから、正解も存在しないことになります。これによって、どれだけ多くの子ども達が救われることでしょうか。

〈資料4〉国語の解釈教育と美術の鑑賞教育¹⁶⁾

美術館に行った時、私達は国語の時間の解釈教育とまったく同じことをやり続けています。絵そのものよりも絵画の脇に掲げてある説明のほうを、重視して読むことを習慣としています。「だれが、いつ、何を描いたのか」が書いてある小さな説明書きを熱心に読み、実際の絵のほうは確認程度に見るだけです。また普通、有名な人が描いたのかどうかに重きを置いており、その事実だけでいい絵なのかどうかを判断しています。

長年行われてきた鑑賞教育におかしさを感じたアレナスは、ニューヨーク近代美術館で子ども達を対象にしてギャラリー・トークを始めました。どういふものかという、彼女が作品についての解説をするのではなく、一つの作品に絞って、それに対する子ども達の様々な反応を引き出していくというものです。そして、彼女はその反応をすべて受け入れ、一つの大きな解釈を子どもと一緒に作り出すというものです。

〈資料5〉みる・かんがえる・はなす¹⁷⁾

アレナスの対話型鑑賞でなされる基本質問はじつに簡単だ。「これは何だろう？」あるいは「何が起きているのだろうか？」という問いからすべてが始まる。子どもの答えにたいしては、「何をみてそう思ったの？」「どうしてそう思うの？」とその根拠を問う。なによりも美術作品にたいする自分の考えが優先され、それを言葉で表現させ、他者の意見を交えながら対話を成立させようとするのである。

そのためにはまず、視覚的な観察力を育てることが重要であるとアレナスは考えている。注意深い観察による発見と判断、そして思考。さらに、それを他の人に話すためには表現力を要する。観察から発見と判断、思考から表現という過程に働くさまざまな力が人々との対話を通して育つ。

これがアレナスの対話鑑賞法のねらいである。このことは、教育のあり方を考える立場からも興味深い。序章で述べた「生きる力」の育成とも密接につながりがある。教育を一定の知識や技術を教えるシステムととらえ、子どもたちに「何かを教えよう」という意識で授業をしていたのでは、こうした力の形成はとうていおぼつかない。かつて芦田恵之助という国語教育では著名な実践家が、学校の先生を評して、ことに教えようとする意識が強くて、ともに育とうとする芽生えはさらにみえていないと、嘆いたことがあった。大正前期のことである。しかし、その状況は現在とあまり変わっていないのではないだろうか。

教える側と学ぶ側に二分され、知識の伝達に終始するような授業やトークでは、自ら学び自ら考える力つまり「生きる力」は育たない。授業やトークを知識が生まれる場ととらえ、観衆の一人ひとりをその創出の場に居合わせるようにするという発想が必要だろう。教師や美術館スタッフもその場の一員であり、対話に参加し意見を交流し合う。この自由な対話の場から「語らいの共同体」は生まれる。授業やトークはそういう小宇宙での対話によって、物事の意味や価値、おもしろさを発見し、味わい、世界をとらえなおすという意味・価値の協同的構築をしていく経験なのだろう。「生きる力」は、知的能力の面だけではなく、他者の立場になって考えたり、共感することのできる豊かな人間性にかかわるものでもある。「自分の見方だけではなく、他人の意見に耳を傾けることで、人によっていろいろ違った作品の見方があることを知る」と、アレナスが述べているが、自己認識だけではなく他者理解におよぶところが対話型鑑賞法の特徴ともいえる。

いくつかの文献を引用することで、「見る」と「読む」とのアナロジーが見えてきた。絵画や写真を「見る」ことも、言語作品を「読む」ことも、読者（鑑賞者）によって、解釈され、意味が作り出されて初めて作品になるということである。意味が作り出されるためには、まず、「これは何だろう？」「何が起きているのだろうか？」と問いかけ、子どもの答えを待つこと、「何をみてそう思ったの？」「どうしてそう思うの？」とその根拠を問うことが必要である。これは、国語教育においても鑑賞教育においても共通する。

3. 3 国語教育と鑑賞教育との連携について

吉田（2010）¹⁸⁾は、国語教育と鑑賞教育両者に共通する問題点を「ある権威者が考え出した解釈を押し付ける」ことだと指摘する。絵画や作品を「見る」ことも言語作品を「読む」ことも読者（鑑賞者）によって対象が解釈され意味が作り出されて初めて作品になる。そこで紹介されたのがニューヨーク近代美術館で行われたアレナスのギャラリー・トーク（対話型鑑賞）である。上野（2011）の著作をもとにアレナスの鑑賞教育の特色をまとめると次の9点になる¹⁹⁾。

- ① 子ども問いからすべてが始まること。
- ② そしてその根拠を問うこと。
- ③ 何よりも作品に対する自分の考えが優先され、それを言葉で表現させ、他者の意見を交えながら対話を成立させようとすること。
- ④ 観察から発見と判断、思考から表現という過程に働くさまざまな力が人々との対話を通して育つこと。

- ⑤授業やトークを知識が生まれる場として捉え、子ども達をその創出の場に居合わせるようにするという発想が必要なこと。
- ⑥「語らいの共同体」をつくりだすこと。
- ⑦授業やトークは、物事の意味や価値、おもしろさを発見し、味わい、世界をとらえなおすという意味・価値の協同的構築をしていく経験であるということ。
- ⑧自分の見方だけではなく、他人の意見に耳を傾けることで、人によっていろいろ違った作品の見方があることを知ること。
- ⑨自己認識だけではなく、他者理解におよぶこと。
- 以上のことを整理したのが後掲図1である。

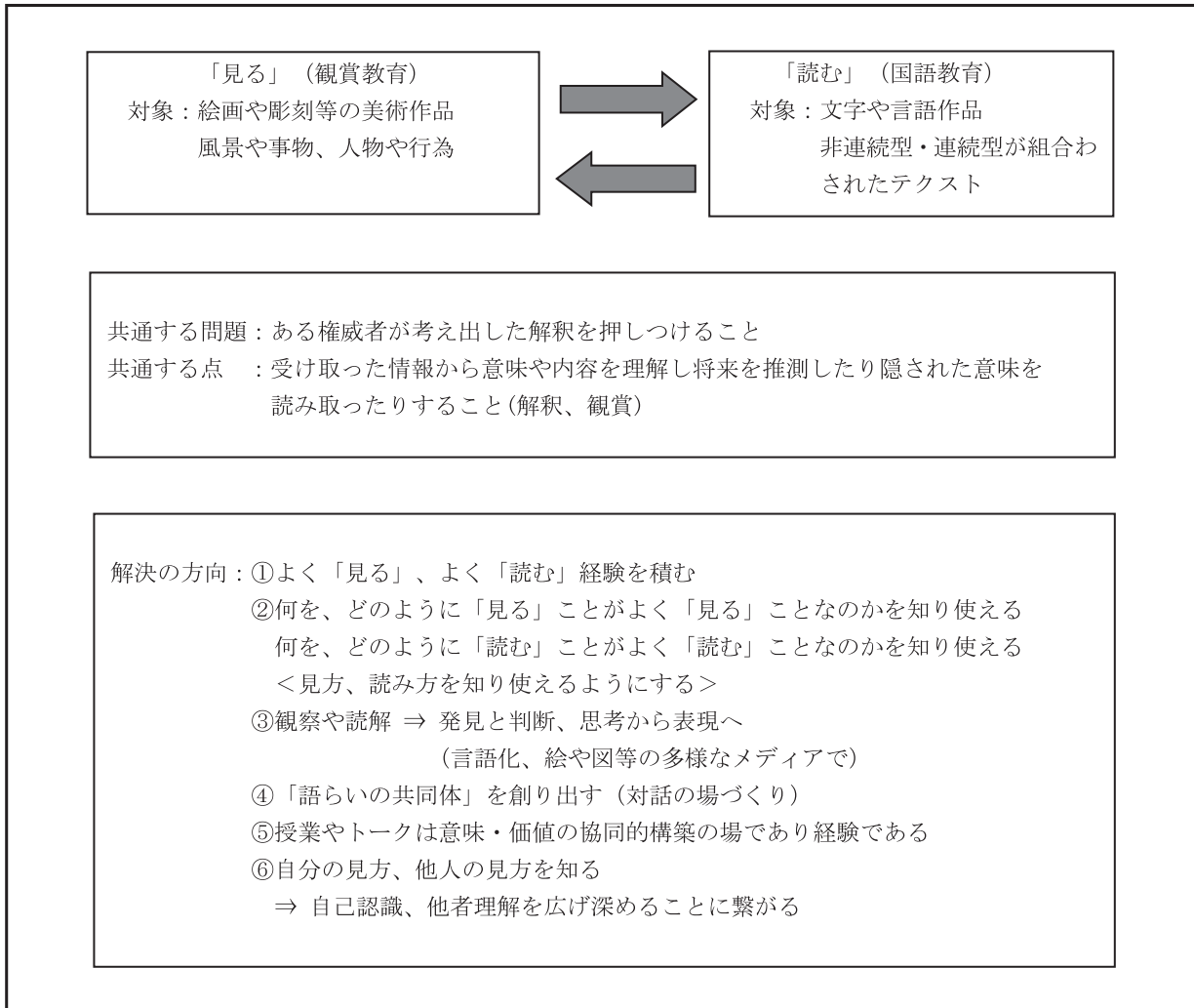


図1 国語教育と美術の鑑賞教育の連携に向けた構造図

4. 教科書教材を用いた「見る」力「読む」力の育成

4.1 視覚的な観察力を育てる

何を、どのように「見る」ことがよく「見る」ことなのか、見方を知るための教科書教材の活用について考えていく。「視覚的な観察力を育てる」ためにはどうすればよいのか。

本稿2章で取り上げた、小学校6年「『鳥獣戯画』を読む」(H27光村図書)の単元名は「筆者のものの見方をとらえ、自分の考えをまとめよう(読む)」である。

「学習」の頁には、「筆者は、『鳥獣戯画』の「何」を「どのように」すばらしいと感じているのだろう。それを、どのように表現しているのだろう。あなたが絵を

見て感じることに、筆者の感じ方に共通点はあるだろうか。くわしく読んで、考えをまとめよう。」とある。

先にも述べたように、H27年版小学校6年国語教科書には、H24版にはなかった【コラム】「絵画や写真を見るときには」が掲載されている。そこで、教科書教材を用いた授業で「視覚的な観察力を育てる」ためには、教材本文や挿絵をどのように活用すればよいのかを考えていきたい。「読む」の中心教材「『鳥獣戯画』を読む」の「たいせつ」、コラムと同単元にある「絵を見る観点」を一覧にしたのが表5である。(下線は坂東が付記した)

表5 教科書に掲載された「『鳥獣戯画』を読む」「たいせつ」、「コラム」、「絵を見る観点」一覧²⁰⁾

たいせつ	コラム「絵画や写真を見るときには」	絵を見る観点
<p>作品の見どころやすばらしさについて書かれた文章には、筆者のものの見方が、工夫して表現されている。次のことに着目してみよう。</p> <p>●何を上げているか。</p> <p>●<u>取り上げたものの、どこに目を向けて、どのような言葉で説明や解説をしているか。</u></p> <p>●どのような言葉で評価しているか。</p>	<p><u>絵画や写真などを見るときにも、文章を読むときと同じような方法で関わる</u>ことができます。</p> <p>例えば、「明るい感じがする。」と思ったら、どの部分からそのような感じを受けたのかを言葉にしてみましょう。同じものを見ている、人によって見方や感じ方がちがうことに気付くことができます。また、<u>一つの作品の全体を見たり、細かい部分を見たり、複数の作品を比べたりすることで、作者の意図や考えが見えてくることも</u>あります。</p>	<p>●何 ●だれ</p> <p>●どこ ●いつ</p> <p>●大きさ ●色</p> <p>●形 ●ポーズ</p> <p>●動き</p> <p>●音 ●におい</p> <p>●天気や温度など</p> <p>●何を表しているか</p> <p>●不思議だ、分からないと感じるところ</p> <p>●絵をかいた人の思い</p>

中心教材は「『鳥獣戯画』を読む」。題名がすでに「画」を「読む」である。題名読みを通して、「見る」を「読む」とのアナロジーで捉え、さらには共通した方法を取り出し意識させて、相互の転用を促すことは可能であろう。表5「たいせつ」の下線部「取り上げたものの、どこに目を向けて、どのような言葉で説明や解説をしているか。」を本文の記述から取り出し具体的に分析・考察を試みる。また、「コラム」の「一つの作品の全体を見る」「細かい部分を見る」「複数の作品を比べる」という「見方」の3方法について、「絵を見る観点」の「ポーズ、動き、何を表しているか、絵をかいた人の思い」とも関連させて、教材本文や挿絵について検討していく。

4. 2 H27版（光村6国語）の本文と挿絵について

高畑勲氏は『鳥獣戯画』をどのように見ているのか。挿絵と対応させて本文の記述を見ていく。

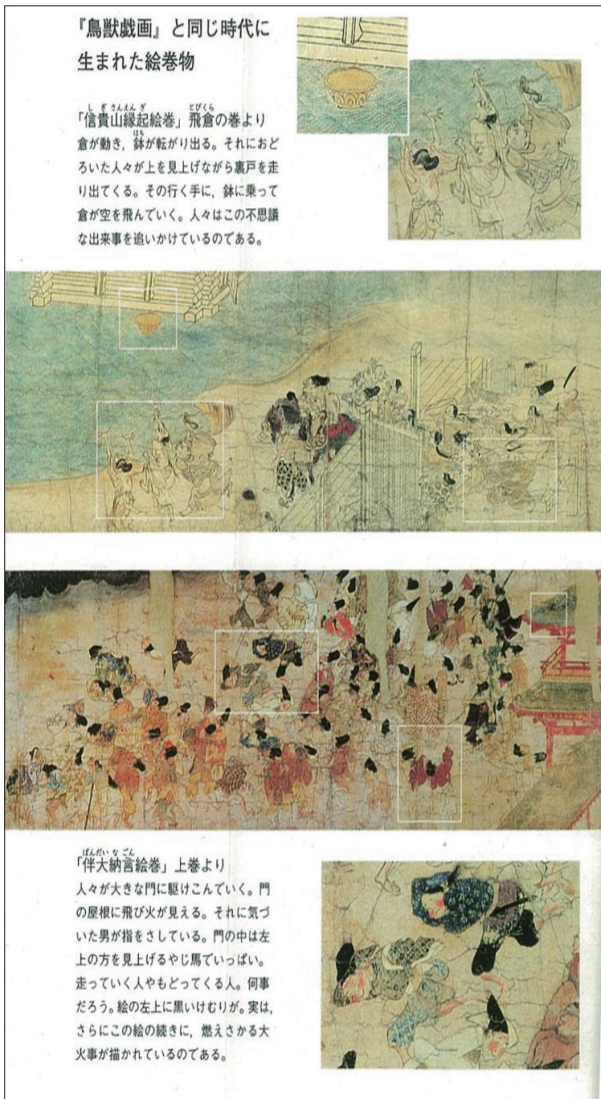
・「もう少しくわしく絵を見てみよう」（p.138,10）
 ⇒「まず、兔を投げ飛ばした蛙の口から線が出ているのに気づいたかな。いったいこれはなんだろう。けむりかな、それとも息かな。ポーズだけでなく、目と口の描き方で、蛙の絵には、投げ飛ばしたとたんの激しい激しい気合いがこもっていることがわかるね。」（p. 138,10-13）



A 本文に対応する『鳥獣戯画』の挿絵（p.139）

「部分をくわしく見る」注意深い観察によって、「蛙の口から線が出ている」という新たな発見が生まれている。さらにその発見から「いったいこれはなんだろう」という問いが生まれた。この問いは、「隠された意味を察知する」という「見る」「読む」に共通する行為を促している。その結果、「蛙の絵には、投げ飛ばしたとたんの激しい激しい気合いがこもっていることがわかるね。」という意味が生成された。「部分を見る」ことには、「ポーズ」だけでなく目と口の「描き方」を見ることであるとも述べている。

H27版の挿絵「『鳥獣戯画』と同じ時代に生まれた絵巻物」（pp.142-143）にも、「全体を見る」「部分を見る」「複数の作品を比べて見る」といった3つの見方が示されている。これらは、前掲表2のI・IIレベルの認識、方略において、「全体を見る（おおまかに、詳細に、近づいて、遠くから、俯瞰的に）」から「部分を見る（詳しく、分析的に）」とある「見方」「見る」方略に相当する。



B 『『鳥獣戯画』と同じ時代に生まれた絵巻物』(p.142)

前ページ挿絵Aの転がった兎についての記述である。

・「もんどりうって転がった兎の、背中や右足の線。勢いがある、絵が止まっていない。動きがある。しかも、投げられたのに目も口も笑っている。それがはっきりとわかる。」(p.138, 2-5)

「転がった兎の背中や右足の線」という動きを感じさせる描き方に着目している。さらに、目や口の描き方「笑っている」ということが分かると解説する。部分に着目してどういう描かれ方をしているのか観察する(詳しく見る)ことによって、「なぜだろう」という「問い」が生まれている。

・「なぜ、兎たちは笑っているのだろうか。」(p.139, 8)

これは「何を表しているのか」、隠された意味を読み取ろうとする行為を促す問いであろう。

「眼前の事物・行為を見て、その将来を推測したり、隠された意味などを察知したりする」ためには、「細部を丁寧にくわしく見る」⇒「それはなぜ」という「問

い」をもつ⇒「隠された意味を推測する」という意味生成の仕方が示されている。これは「読む」ことにおいても同様であるだろう。図1「③観察や読解⇒発見と判断、思考から表現へ」に相当する記述である。もう1カ所。

・「この三匹の表情もまた、実にすばらしい。それぞれが、どういう気分を表現しているのか、今度は君たちが考える番だ。」(p.140, 8)

表情を詳しく見ることで、「何が表現されているのか」その隠された意味を察知するように促している記述である。「見る」から「意味を生成し」て、絵巻を見るだけではなく、絵巻を「楽しんで読む」ための方法が示されている。

さらに注目したいのは、140頁12行目からの8段落目である。「この絵巻がつくられたのは、今から八百五十年ほど前、平安時代の終わり、平家が天下を採ろうとしていたころだ。」で始まる段落である。この8段落と次の9段落が、前掲表2のⅦ、Ⅷレベルに相当する。Ⅶ「社会文化的背景や因果関係を認識する」Ⅷ「時間軸や空間軸にテキストを位置づけ認識できる」である。制作された時代や社会文化的背景と、生き生きとした描かれ方には関係があるのかという「問い」を立てて考えることも、ある時代の絵画テキストを見て解釈するためには必要である。

次の挿絵は小学校6年生の社会科教科書「新編新しい社会6上」(東書H29)²¹⁾に掲載されたものである。

馬の躍動的な動き、足や腰の線と『鳥獣戯画』の転がった兎の背中や右足の線の描かれ方には共通するものがある。平安時代(貴族社会)から鎌倉時代(武士の世)への時代の変化がこれらの描かれ方に影響を与えていることは間違いない。ここから、表2のⅦ、Ⅷレベルに達する「見方」を、中心教材を読むから取り出すことも可能かと考える。

さらに、前掲「表3」の目次を見ると、次の単元は「7 伝統文化を楽しもう(読む) 伝えられてきたもの」である。これも、H24年版にはなかったものである。154頁155頁には、文章だけでなく、「万葉集」の写本、「源氏物語絵巻」「平家物語絵巻」「東海道中膝栗毛」といった各時代の絵画や、下段には年表が示されている。これと、小学校6年生の社会科(歴史)を繋げる学習も考えられる。



C 元の兵士と戦う竹崎季長（鎌倉時代）p.54



「平家物語絵巻」

D 伝統文化を楽しもう（p.154）

教科書本文（国語）には、「鎌倉時代や室町時代になると、武士がかつやくし、戦いをあつかった作品が登場します。『平家物語』には、勇ましい武士の戦いぶりとともに、時代の変化の中で生きる人々の心情もえがかれています。」（p.155,7-9）がある。「伝統文化」を時代背景、社会背景、文化的背景と関連づけて「見る」「読む」に相当する。表2 レベルⅦ「社会・文化的な文脈がテキストに反映されているか考える」、レベルⅧ「時間軸や空間軸にテキストを位置づけ認識できる」である。

H27版『国語六 創造』には、「図画工作で、絵やちょうこくなどを鑑賞し感じたことを書くときに生かしましょう。」（p.150）という記述もなされている。教科横断的な学習への展開を示唆したものと考えられる。

4. 3 教科書教材を用いた「見る」力、「読む」力の育成

H27年版「国語六創造」（光村）には、H24年版にはなかった「コラム」（絵画や写真を見るときには）が掲載された。また、中心教材「『鳥獣戯画』を読む」の手引き「たいせつ」や次の「絵を見る観点」も併せて掲載されている。コラムだけでなく単元配列においても、教

材の内容、絵画的資料や年表の提示にも、「読む」⇒「見る」ことの意識化⇒「書く」という流れに学習者の意識を向ける意図が見られる。

中心教材「『鳥獣戯画』を読む」の本文と挿絵を対照させながら、筆者の絵の見方、その記述の仕方を取り出し、コラムを契機としながら、「よく見る」という「見方」で「見る」とはどのように見ることなのか、どこに着目すれば、どんな発見ができるのか、それを言語化することはどうすることなのか、絵を読むという国語教科書教材で具体的に学習することが可能である。

さらに現行教科書教材の配列や手引き、コラムは、筆者が提案する、「見る」「見ること」レベルの整理（試案）「認識」「方略」「思考」「言語化」の4領域全てに関わる学習に発展させることが可能なものである。

これはH24年版にはなかった発想である。H24版とH27版を比較すると、H27版は、挿絵、グラフ、伝統文化の歴史的背景、社会的背景、文化的背景に目を向けようとする編集意図が顕著に表れている。もちろん、この背景には2006年頃に多く議論された「PISA型読解力」の問題があることは確かである。2006年のPISA調査以降、国語科では「連続型テキスト」だけでなく「非連続型テキスト」を含む多様なテキストを読む力を養うことが求められるようになった。これは「個々人は成人後の生活に関連する活動の中で多くの種類の書かれたテキストに遭遇するため、通常学校で遭遇する限られた種類のテキストを読むことができるだけでは不十分である、という原則に基づいている。」²²⁾

「よく見る」という「見方」を現行の国語教科書教材から取り出し「よく読む」という「読み方」で「読む」とを連動させながら「よく考える」「様々な視点から物事を捉える（解釈し認識する）」プロセスを、教科書を用いた授業で創り出すことは実現可能であると考えられる。

5 おわりに

本稿では、国語科における「見る」力の系統的な育成を目指す研究の一環として、現行の教科書教材を用いた「見る」力の系統的育成を実現可能な形で提案することを試みた。中でも、小学校国語教科書における「絵画や写真を見る」観点に関するまとまった記述に着目し、「読む」の中心教材「『鳥獣戯画』を読む」から、「よく見る」という「見方」を取り出し、それを「よく読む」という「読み方」で「読む」と連動させながら、「よく考える」「様々な視点から物事を捉える（解釈し認識する）」プロセスを、教科書教材を用いた授業で創り出すための実現可能な提案を試みた。

さらには、「よく見る」とはどのように「見る」ことなのか、筆者が提案する「見る」「見ること」レベルを

意識した、「見る」力の系統的育成に培う教科書教材を用いた授業の可能性と必要性を重ねて説いた。

しかし、小中高の系統的、系統的な育成方法の具体的な提案についてはまだ手つかずの部分が多い。今後も、現行国語教科書教材を用いた、実現可能な提案を継続して行っていきたい。

〈注〉

- 1) 藤森裕治 (2003) 「国語科教育における映像メディアの教育内容—メディア・リテラシーの視点から—」国語科教育、53、pp.18-25。藤森裕治 (2004) 「第四の言語活動『みること』—批判力を育てるメディア・リテラシーの行方—」月刊国語教育研究、383、pp.2-3。浜本純逸 (2004) 「国語教育・国語科教育」田近洵一・井上尚美編『国語教育指導用語辞典(第3版)』教育出版、pp.256-257。奥泉(岩本)香 (2004) 「メディア教育を支える「見ること (Viewing)」領域の構造と系統性：西オーストラリア州の場合」千葉敬愛短期大学紀要、26、pp.65-96。
- 2) 石田喜美 (2011) 「国語科教育における「見ること」の学びに関する一考察：現代アートの鑑賞教育プログラムにおける学習者のテキスト生成過程の分析から」人文科教育研究、38、pp.37-48。
- 3) J.G.ヘルダー (1972) 『ヘルダー—言語起源論』(木村直司訳)大修館書店。
- 4) 鹿内信善 (2006) 「『見る』活動を取り入れた国語科授業づくりの可能性：絵図教材の創造的読み」『初等教育・教師教育研究』27、年報いわみざわ、pp.1-12。
- 5) 浜本純逸 (1996) 『国語科教育論』溪水社、pp.32-33。浜本純逸 (2004) 「国語教育・国語科教育」田近洵一他編『国語教育指導用語辞典第3版』教育出版、pp.256-257。
- 6) 町田守弘 (2005) 『声の復権と国語教育の活性化』明治図書、pp.131-133。
- 7) 奥泉(岩本)香 (2004) 「メディア教育を支える「見ること (Viewing)」領域の構造と系統性：西オーストラリア州の場合」千葉敬愛短期大学紀要、26、pp.65-96。鹿内信善編著 (2010) 『看図作文指導要領—「みる」ことを「書く」ことにつなげるレッスン—』溪水社。
- 8) 坂東智子 (2014) 「教養教育における古典授業の開発 (1) —7枚の源氏絵で読む源氏物語—」『語文と教育』第28号、鳴門教育大学国語教育学会、pp.73-84。坂東智子 (2015) 「国語科教員養成課程で出会う『源氏物語』」(2) —「国宝・源氏物語絵巻柏木二」を読む—『教育学研究紀要』第60号、中国四国

教育学会、pp.439-444。

- 9) 坂東智子 (2018) 「『見る』を含む学習の系統性 (1) —絵画や写真を見るときには—」全国大学国語教育学会大阪大会要旨集
- 10) 9) に同じ。
- 11) 甲斐睦朗他 (2015) 『国語六 創造』光村図書、136-149。
- 12) 宮地裕他 (2012) 『国語六 創造』光村図書、pp.132-145。
- 13) 11) に同じ。
- 14) 小学館国語辞典編集部 (2003) 『日本国語大辞典 第二版』小学館。
- 15) 吉田新一郎 (2010) 『「読む力」はこうしてつける』新評論、pp.38-39。
- 16) 15) に同じ、p.45。
- 17) 上野行一監修 (2001) 『まなごしの共有 アメリカ・アレンスの鑑賞教育に学ぶ』淡交社、pp.49-50。
- 18) 15) に同じ。
- 19) 17) に同じ。
- 20) 11) に同じ。
- 21) 北俊夫他 (2017) 『新しい社会 六上』東京書籍、p.54。
- 22) 高木辰郎 (2006) 「『読解力』をどうとらえるか」日本語学、明治書院、2006年6月号。

【附記】

本稿は、平成31年度科学研究費補助金(基盤研究(B)) (研究代表者:吉川幸男 課題番号17H02703) による研究成果の一部である。